

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ④9

今、仏に値う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第121回と122回は東京国際フォーラム（有楽町）、123回はビジョンセンター東京八重洲南口で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第118回から一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■無量寿仏の声を聞く

「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし」（『真宗聖典』〔東本願寺出版、以下『聖典』〕64頁）。「今」、今と、このあたりでは繰り返されますね。今、仏に値う。仏に値遇する。見仏とも言うのですけれど、ここでは「値仏」と。仏にまみえる。弥勒菩薩が今ここで対告衆を代表して仏に教えを聞いているわけですが、仏に値うというのは釈迦如来の教えに値うということ。その釈迦如来の教えは無量寿仏の声を聞かせるための教えである。無量寿仏の声を「みな」とルビを振っています。無量寿仏の御名を聞く。聞くというのは、これは第十八願成就の文の「聞其名号」（『聖典』44頁）の「聞」を示しているわけです。「無量寿仏」というのは、「南無阿弥陀仏」で、「南無阿弥陀仏」という御名には、声がある。声なき声が御名である。

親鸞聖人は、この『大無量寿経』は真実教だと押さえられて、真実教の体は名号だと。そして名号は本願を説き、法蔵菩薩の本願を開いてゆくという形で、名号がどういう意味をもって衆生に願をかけているのかが教えられてくる。そういうことが、この經典のもっている大事な二本柱、宗体と言うのですけれど、宗と体です。体は名号である、宗は本願を説くことだと。こういうふうに通じられているわけです。ここでは、仏に値うことは仏の教えに値うわけですが、仏の教えに値うということは無量寿仏の声を聞くのだと。

そして、「歓喜せざるものなし」。十八願成就文の「信心歓喜」（『聖典』44頁）です。もし、聞くことができるなら、「聞其名号」が成り立つならば、



信心歓喜であると。本願成就の文では、本願はどこに成就するかと言ったら、「其有衆生」、「それ衆生ありて」（同上）と。この衆生は凡夫です。その凡夫が名号を聞くことができるならば、信心歓喜する。こう本願成就の文が語っている。

■本願成就とは「聞其名号」、信心成就

本願が成就したとは何のことだろうと、なかなか意味が分からないのです。それはやはり『無量寿経』の教えを聞いてきた、聞き当ててきた歴史があって、その歴史に出遇ったのが親鸞という人です。親鸞聖人は「聞其名号」ということ、ここに本願成就の意味があると。それは信心が成就するということだと。「本願信心の願成就」（『聖典』228頁）と、こういうふうにおっしゃる。願が成就したということは、我々に信心が与えられたということだと。我々に信心が起こるのは本願が成就したのだ、如来の大悲の本願が成就してくださったのだと。こういう意味をもって我々に本願を信ずるという体験が起こる。自分で信ずるわけではない。自分に信ぜずにおられないという心が立ち上がって来るのは、如来の本願が成就するのだと。こういうのが、親鸞聖人の了解の仕方です。

「無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし。心開明することを得つ」（『聖典』64頁）。今ここでは弥勒菩薩が、衆生を代表して、我が心が開かれて明るくなることのできたのだと言っているわけです。この人生は暗い業の歴史、悪業の歴史の因縁で苦悩の人生しかない、そういう絶望状況のように見える中に明るみが見えたということが教えられてくる。

松原祐善という大谷大学の学長もなさった方が、この「今得値仏 復聞無量寿仏声」、この言葉を揮毫しておられたことがありました。松原先生はなぜ『無量寿経』のこの言葉を書かれるのかなど、その文字を読んだとき、私は何かちょっと不思議な思いがしました。実は、ここで今、申しましたように、この「今得値仏」の仏は教主世尊で、そして「また無量寿仏の声を聞きて」、これは本願成就を表している。そう気づいて見ますと、松原先生の書かれた文字の意味が、「ああ、そうだったのか」といだける、松原先生と改めて出遇ったような、大変嬉しい思いがしたことです。

（文責：親鸞仏教センター）

第16回 親鸞仏教センターの つどい

竹村 牧男 氏(東洋大学学長)
本多 弘之 (親鸞仏教センター所長)



4月16日に東京都千代田区の学士会館講堂において、第16回親鸞仏教センターのつどいを開催した。

第1部の「おつとめ」を親鸞仏教センター（文京区）において行い、その後、会場を学士会館に移し、第2部の「記念講演」と「交流懇談会」が行われた。さまざまな分野から約60名の有識者の方々が集った。記念講演では『アンジャリ』第17号にご寄稿頂いた東洋大学学長の竹村牧男氏が「往生のその先について」の講題のもと講演を行った。

(囑託研究員 大谷一郎)

竹村氏は「親鸞浄土教の基本」、「弥勒使同・如来等同」、「往生による成仏の意味とは」、「還相とはなにか」、「還相はいつはじまるのか」という5つの視点に沿って論を進めた。

まず、親鸞聖人が第十八願を「至心信楽の願」と名づけたことに触れ、『無量寿経』下巻冒頭の本願成就文にある「一念」は念仏ではなく、如来よりたまわたりたる「信心」であり、その「信」は「聞」より生まれ、そこに救済があることが親鸞浄土教の根本にあるとし、また、浄土に往生して救われるということはどういうことなのかを、自己の救いの問題として自覚していくことが重要であることを指摘した。

そして、浄土に往生するということは、実体としてどこかに生まれるのではなく、曇鸞大師の言う「無生の生」の世界が開けることであり、親鸞聖人においては、無生の世界に生まれることと、無上覚を覚ることであると領解した。つまり無上涅槃と無上仏は一つであって、我々が弥陀の本願力によって大般涅槃を証するとき、自己としての個は消えるのではなく、無上仏として実現する。さらにはむしろ方便を生きる個として、自利利他円満の存在ともなり、自在に方便を示現して具体的に利他に生きる者となると述べた。また、浄土教において、その利他の主体を完成することが浄土に往生するということの本質的内容であるという明瞭な認識、了解が必要であるとした。

最後に道元禅師の『正法眼蔵』の言葉を引き、

弥陀の本願に本当に救われていないうちは、あたかも救われたかのようにそこに安住してしまい、しかし本当に弥陀の本願に貫かれたなら、この生き方では申し訳なく、不足の身であることを自覚し、足りないながらも自信教人信を尽くさざるを得なくなると論じた。また、鈴木大拙の「極楽に行ったらすぐに還ってくる」という言葉を講演の初めと終わりに引用し、還相ということは決して死後の問題ではないことを指摘した。

続いて、本多弘之所長が「願生心と菩薩道」と題して講演。まず、大乘仏教の菩薩道においては、自らの作為や分別なしに利他行を自在に行うことが究極的なあり方として求められるようになっていったが、いくら求めて行っても、無分別、自在に菩薩道を生きることが可能にならない人間というところに、浄土を求めずにはいられないという要求が生じ、そのことが、『無量寿経』が本願を説く背景にあるのではないかと論じた。

そして、親鸞聖人は、如来からの光に照らされた自覚、無明煩惱にみちているという自らの深い自覚のもとに、それまでの菩薩道の回向というもの『無量寿経』所説の本願力の回向であるとし、回向の主体は阿弥陀如来であり、回向という形で呼びかける大悲のはたらきがあると読み解かれた。そして、親鸞聖人は、真信心を得ることが何よりも大事なことであり、それを得るということにおいて、如来の悲願と相応するような眼が開けるということを、一生をかけて明らかにしようと述べた。

最後に、菩薩道の課題を願生心をとおして我々はいただくことができ、その願生ということも凡夫の心が願うのではなく、如来の願いが根拠になっており、本願を信ずるということの中に「願生彼国 即得往生」が成り立っているというのが、親鸞聖人の了解であると結んだ。

(文責：親鸞仏教センター)